

カルチュラル・スタディーズ学会

Association for Cultural Typhoon

第6期幹事会始動しました

代表幹事 小笠原博毅

学会員のみなさん

みなさんのご支援ご協力にあらためて感謝申し上げます。新しい年度となり、第6期幹事会が発足してはや半年が過ぎました。このたび幹事会からの発信を密に豊かにするとともに、学会活動の透明性を高め、ひろく理解と参加を促すために幹事会編集によるニュース・レターを定期発行することとなりました。当面ウェブに限ったものになります。どうぞよろしく願いいたします。

昨年の成城カルタイによってフェミニズムが学会活動の大きな軸となりましたが、ジェンダーのみならずあらゆる多様性の平等を実現するための現状把握として「ジェンダー平等および多様性に関するアンケート」を実施しました。お答えいただいた会員のみなさま、どうもありがとうございました。このアンケート結果をもとに学会として取り組むべき具体的な課題を見定めていく所存です。

学会誌『年報カルチュラル・スタディーズ』第11号の編集作業も順調に進んでおります。

投稿された方々、査読の労をとっていただいた方々にあらためて御礼申し上げます。

そして、2023年度のカルチュラル・タイフーン早稲田大会の開催日程が9月2日（土）、3日（日）に、グランド・テーマが「新しい戦（中）前とフェミニズム」に決まりました。個人発表、グループ発表、プロジェクトワークスすべて、4月15日から公募が開始されます。今年は関東大震災から100年、カルタイ開始から20年、学会発足から10年の節目です(!?)。このような時間の蓄積と近年のパンデミックやレイシズムの問題を絡めて、浜邦彦委員長を中心にシンポジウム企画も練られ始めております。基調講演者への依頼と交渉も進んでおります。順調です。早稲田カルタイについて進捗を随時更新してまいりますので、会員のみなさんからのご意見等もお寄せください。

さて、この間、主催・共催を含め、研究会企画委員会を中心に企画・実施されたワークショップやシンポジウムも何度か開催されました。それらを2023年3月末時点で列挙



してみますと・・・

- ・「サパティスタの女性たち——台所と寝室からの革命」(2022年12月17日、カルチュラル・スタディーズ学会主催による映画「After the Revolution」上映+講演+研究会)
- ・「南の島をめぐる旅——『翻訳文学紀行IV』への招待」(2023年2月16日、神戸大学 Promis 主催/カルチュラル・スタディーズ学会共催トークイベント)
- ・「吉見俊哉『空爆論』を眼差しかえす試み」(2023年2月23日、成城大学グローバル研究センター/カルチュラル・スタディーズ学会主催シンポジウム)
- ・「こだまする球音、混じり遭う境界——日台野球文化のハイブリディティ」(2023年3月1~2日、神戸大学 Promis 主催/カルチュラル・スタディーズ学会共催国際シンポジウム)
- ・「マイノリティの経験を継承する——ライフストーリー・記録/記憶・代表性」(2023年3月16日、立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会/カルチュラル・スタディーズ学会主催映画上映&講演会)
- ・「資本主義と<ブラック>の行方」(2023年3月26日、神戸大学 Promis 主催/カルチュラル・スタディーズ学会共催、中村隆之著『環大西洋政治詩学』(人文書院、2022年)・ガルギ・バタチャーリヤ著、稲垣健志訳、小笠原博毅緒言『レイシャル・キャピタリズムを再考する』(人文書院、2023年)刊行記念合同書評会)

テーマも開催形態も多岐にわたり、第6期の「個性」が次第に色づき始めています。4月以降も数多くの研究会が予定されてお

り、さらに多くの学会企画イベントが開かれます。みなさん、積極的なご参加をお願いします。

また、IFRAE (フランス東アジア研究院) と CRCAO (東アジア文明研究センター) に属する Populations japonaises 研究グループが主催する連続セミナーを学会として後援することになりました*。このような活動について、周辺の研究者や学生、興味を持たれそうなご友人・お知り合いにもひろく喧伝してください。会員のみなさんの本務校で主催されるイベントにも、学会としてできる限り関わっていきたくて考えております。共催などでの連携強化にも、一層のご協力をお願い申し上げます。

* * *

第4期、第5期の幹事会メンバーとしてカルチュラル・スタディーズ学会でも活躍されたケイン樹里安さんが、昨年5月13日に亡くなりました。学会として、ご家族のみなさまに深い親愛と哀悼の意を表したいと思います。本号では、ケインさんとともに『ふれる社会学』(北樹出版、2019年)を編集された上原健太郎さん(大阪国際大学)に、ケインさんから何を引き継ぎ、何を受け取られたのか、ご寄稿いただきました。

上原さんに感謝申し上げるとともに、残された私たちはケインさんが何を伝えようとしてくれたのか、また彼が考えたかったこと、訴えたかったことを私たちはどのように継承できるのか、しっかりと考えていきたいと思っています。■

*<http://www.inalco.fr/actualite/cycle-conferences-productions-pratiques-culturelles-japon-contemporain/conference-series>



第6期第0回幹事会議事録

日時：2022年9月26日午前10時～正午

出席者：小笠原、菊地、田中、竹田、川端、山本、井上

欠席者：なし

・各幹事の自己紹介のあと、各幹事の役割の確認をおこなった。

小笠原博毅：代表幹事（学術交流担当兼務）、井上弘貴：事務局担当（副代表兼務）、菊地夏野：研究企画担当、田中東子：研究企画担当（HPリニューアル担当兼務）、竹田恵子：ジェンダー平等推進担当、川端浩平：編集担当、山本敦久：大会担当（広報兼務）

・ジェンダー平等推進担当と研究企画担当は、とくに密接に連携をとることを確認した。

・各委員会の委員の人選をおこなった。

・ Gianluca Gatta (Rome/NYC)、Gietty Tambunam(Jakarta)、Ian Condry (MIT)、Jules Boykoff (Portland)を今期の海外アソシエートに委嘱する旨、代表幹事から報告がありました承された。

・年間スケジュールの確認をおこなうとともに、次年度のカルチュラル・タイフーンの開催校について検討をおこなった。

・2022年度から開始した若手研究会活動助成は2023年度も継続することを確認した。

・国際シンポジウムの開催、海外との学術交流の今後の促進について意見交換をおこなった。あわせて、当該年度のカルタイへの布石となるスプリング・スクールの実施の可能性についても検討を開始した。

・2022年度末をめどに現在の学会ホームページの抜本的リニューアルを進めるべく、委託業者との打ち合わせを進めることを確認した。

・今期の幹事会からニューズレターを発行することを確認した。

第6期第1回幹事会議事録

日時：2022年12月5日午前9時40分～午前11時

出席者：小笠原、田中、竹田、川端、井上

欠席者：菊地、山本

□幹事会開催に先立ち、前回（第0回幹事会）議事録の確認をおこなった。

□研究企画委員会

・研究会開催の年間スケジュールについて報告がおこなわれた。

・研究会のうち学会から謝金等を支出する研究会について、支出が承認された。

・代表幹事より、研究企画委員会のスケジュールに追加して、2023年3月に複数回、神戸大学国際文化学研究推進インスティテュートとの共催による研究会を開催することが報告された。

□ジェンダー平等推進委員会

・現在作成中のGoogleフォームによるアンケートについて準備状況が報告された。

□編集委員会

・編集委員長より次号年報の論文投稿状況が報告された。

・次号の特集はフェミニズムであることが委員長より報告された。

・カルチュラル・タイフーンの開催時期が2023年度も9月に後ろ倒しになることを踏まえ、今後、年報の発行時期も2ヶ月後ろ倒しにすべきかについて、委員長より検討を開始したい旨、報告があった。また、査読者の職位（現行では原則として准教授以上と定めている）についても検討したい旨、報告がなされた。



□大会委員会

・2023年度開催校の交渉状況について報告と意見交換をおこなった。

□事務局

- ・50名の入会申請について承認がなされた。
- ・ホームページのリニューアルの進捗状況について事務局からの頭出しのあと、田中幹事のほうから詳細の説明がなされた。
- ・ホームページのリニューアル作業については2023年1~2月に仕上がる見通しであることが確認された。
- ・【事務局追記】実質的に運用を停止している旧メーリングリストについて、スパムメールの投稿が深刻になったため、2022年12月9日付で会員に周知のうえで閉鎖の手続きをとった。これ以降、会員管理システムSMOOSYからのメール配信に一本化する。

第6期第2回幹事会議事録

日時：2023年3月5日午前11時~正午

出席者：小笠原、菊地、田中、竹田、川端、山本、井上

欠席者：なし

□研究企画委員会

- ・これまでにおこなわれた研究会についての実施報告がなされるとともに、今後の開催予定の研究会の概要が報告された。
- ・日程調整の進められていた若手研究会の日程について、5月20日（土）とすることを確認した。

□編集委員会

- ・『年報カルチュラル・スタディーズ』第11号の投稿論文の査読状況が報告された。
- ・第11号の特集ならびに書評をめぐる編集状況が報告された。
- ・投稿論文にて用いられる図版の著作権に

ついて幹事会で意見交換をおこなった。

□大会委員会

- ・次年度の開催校ならびに開催日程について、代表幹事と大会担当から幹事会に報告がなされた。
- ・各種の発表の応募開始を4月15日にすることを決定した。
- ・次年度については、対面開催を基本として、基調講演とシンポジウムを中心に一部を配信することを確認した。
- ・学会本体の大会委員会と開催校実行委員会の役割分担として、次年度については個人発表の受付を学会本体が担当し、グループ発表（シンポジウム含む）とプロジェクトワークスの受付については開催校実行委員会が担当することを決定した。

□ジェンダー平等推進委員会

- ・Googleフォームによるアンケートの文案が報告され、若干の最終調整を加えたうえで、会員を対象にアンケートを実施することが了承された。

□事務局

- ・学会ニューズレター創刊号の編集状況について報告がなされた。
- ・ホームページのリニューアル作業の進捗状況が報告された。
- ・2023年度若手研究会活動助成の申請について審議をおこない、3件の申請について幹事会として採択の判断をおこなった。2023年度助成団体と助成額は下記のとおり。
「アート/ケア/文化政策」研究会（申請者 齋藤梨津子）助成額 50,000-
「歩考の科学」研究会（申請者 高原太一）助成額 20,000-
「バスケットボール・スタディーズ研究会」（申請者 松本淳也）助成額 20,000-



「サパティスタの女性たち——台所と寝室からの革命」(2022年12月17日、カルチュラル・スタディーズ学会主催による映画「After the Revolution」上映+講演+研究会)

水本 千晶

去る12月17日、神戸市灘区の古本屋ワールドエンズガーデンにて、カルチュラル・スタディーズ学会研究会として、レティシア・アグド監督の作品「After the Revolution」(2008年)の上映会と、同志社大学グローバル地域文化学部の柴田修子さんをゲストに迎え、学会研究企画委員の川上幸之介の司会によるトークが行われた。

この映画はサパティスタという運動が、どのような影響をメキシコの先住民たちにもたらしたのかを描いたものである。映画の中では、時代とともに緩やかに変化していく、集団、コミュニティとしての家族の姿が描かれていた。サパティスタ運動は、人々に「自分のことは自分で決める」という精神をもたらした。そして、それは先住民として、女性として、「自分で決めること」を知らなかった人々にさまざまなコミュニティを通して広がった。サパティスタが大事にしていることに、「絶対的なことはない」というものがあるが、それが、自分で決めることに気づくきっかけになったのだと思う。

自分で決めることを通じて、家族のありかたは変化した。夫の言いなりだった妻は自分の考えを夫に伝えるようになり、かつて暴力をふるっていた夫は、妻、子どもの意見を聞くようになった。子供たちは、暴力をふるう父を当たり前だと思わなくなり、男女関係なく台所の手伝いをしている。サパティスタの反乱は政府軍による、徹底的な鎮圧を受けたが、その小さな抵抗が、次の世

代にいいものを残し、緩やかな変化につながっていくのだと思う。

映画の中で「できることからやっただい」という言葉があった。緩やかな変化が起こったのは、できることからやっただいと思う。しかし、「できること」とは、だれが決めるのだろう。できることをするには、自分に能力があり、能力が発揮できる環境が必要だと考える。自分に能力があっても、その能力が使える環境にないと、「できること」もできない。能力が使える環境は自分だけの影響ではなく、外の影響もある。となると、何ができるか、というのは自分で決めたことではないように思える。そもそも、自己というのは、外部の様々な影響からできている。自己を決定しているのさえ、外部なのだから、「できること」を決定するのも、外部なのではないだろうかと思う。■

「吉見俊哉『空爆論』を眼差しかえす試み」(2023年2月23日、成城大学グローバル研究センター／カルチュラル・スタディーズ学会主催シンポジウム)

高原 太一

カルチュラル・スタディーズ学会研究企画委員会メディア研究部会(担当:田中東子・高原太一)と成城大学研究機構グローバル研究センター(担当:山本敦久・高原太一)共催による研究会「『空爆論』を眼差しかえす試み—吉見俊哉氏をお迎えして」を、2023年2月23日(木)の14時から17時に、成城大学3号館大会議室にて実施した。

同会は、成城大学グローバル研究センター副センター長・山本敦久による「趣旨説明」に続いて、第一部講演は『空爆論 メディア



と戦争』(岩波書店、2022)の著者で、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授・吉見俊哉による講演(60分)、休憩を挟んだ第二部は、若手研究者からの応答として、成城大学グローバル研究センターPD 研究員・高原太一による口頭発表「吉見俊哉『空爆論』を眼差しかえす一つの試み」(20分)と第二部司会を務めた東京経済大学コミュニケーション学部准教授・大尾侑子によるコメント(10分)と吉見による返答に続いて、会場との質疑応答がおこなわれた。

奇しくも「侵攻」から一年を翌日に控えた同会の眼目は、2001年の911以降、戦争とメディアの関係性を一貫して追求してきたカルチュラル・スタディーズの代表的論者の一人・吉見が、ウクライナ戦争という新たな状況を前にして、いかなる「介入」や「批評」の可能性を示すのかに置かれていたが、そのメディアがなにを意味するのか、吉見の研究史における変遷を押さえながら論じられるものとなった。

吉見が繰り返し強調したのが「ドローンはテレビである」というマクルーハンのメディア概念を根底においたメディア論/技術史における現在の「ドローン」の位置付けであり、メディア行為に力点を置くがゆえに、東京大空襲と呼ばれる出来事をあえて「東京空爆」という空爆をする側の眼差しから捉えることの重要性(吉見の言葉でいえば「空爆そのものがメディア行為であり、「視ること」は「殺すこと」というテーゼ)が語られた。

それに対して、高原は戦争において、視ると視られる、殺すと殺されるは、そんなにも二項対立的なのかと問いた。大尾は、家族史を引きながら、空から眼差す者の暴力性に

触れつつ、しかしそこには盲点や死角が存在することを指摘した。時間の関係上、29人が集まった会場と十分に討議はできなかったが、今年度で退職する吉見が所属する情報学環に来年度から進学するという「若手」の発言が多かったのは、同会の(隠れた)成果の一つではないか。

同会が残した今後への課題として、グローバル研究という意味では「東京空爆」のローカルな歴史や実践が、カルチュラル・スタディーズという点では吉見がいう「天空を眼差す路上の死体」たちや「亡霊」の声を擲り上げていくことではないか。(高原は「メディアと戦争部会」の第二回目講師として武蔵野ふるさと歴史館学芸員・高野弘之を提案したい)。

なお、同会の記録は、成城大学グローバル研究センター教員・青山征彦と同ゼミ生5名によって映像・音声で記録され、文字起こしは株式会社「未知の駅」(代表・諫山三武)に同センター経費から委託。センター機関誌『グローバル研究』に掲載することを検討している。また、吉見さんへの講師謝礼もグローバル研究センターから捻出した。■

「こだまする球音、混じり遭う境界——日台野球文化のハイブリディティ」(2023年3月1~2日、神戸大学 Promis 主催/カルチュラル・スタディーズ学会共催国際シンポジウム)

日台野球シンポ 参加報告

前田 暉一朗

野球文化を環太平洋的な視座から非国家的に捉え直そうという新たな試み

TPBS(Network for Trans-Pacific Baseball



Studies)の第1回研究会が3月1日から2日にかけて行われた。

第1日目である3月1日には、台湾・国立成功大学の謝仕淵さん、大東文化大学の野嶋剛さん、そして成城大学の山本敦久さんをゲストに迎えたシンポジウムが開かれた。それに先立ち、1931年に日本統治時代の台湾から甲子園初出場を果たした嘉義農林学校野球部を描く映画、『KANO 1931 海の向こうの甲子園』(2014年)の上映会が開催された。馬志翔監督手がける本作は若干の脚色を含むが、弱小野球部が日本人監督の就任を機に甲子園を目指し、実際に出場にまで至る様子を丹念に描写しているという点において、日台の野球史を追いかける上での良い足がかりになる。

映画を踏まえた各登壇者の発表について、以下の2点をポイントとして提示したい。まず1点目が、台湾の原住民について。甲子園への出場を果たしたKANOのチームに原住民が数人いたことが描かれていたが、戦後の台湾における野球をKANOの選手たちとその子や孫世代が支えた、という野嶋さんの話は非常に興味深い。台湾プロ野球において原住民の占める割合が全人口に対するそれと比べて圧倒的に多い事実は、野球が日本統治期の原住民にとってどういう意味を持ち、そしてどのように浸透し、変容したかを考えるうえで見逃すことはできないだろう。

2点目は、技術の伝播についてである。亜細亜大学の「亜細亜ボール」や健大高崎高校の「機動破壊」など、野球における技術はしばしばチームや組織の伝統・特徴と結びつけて語られる。シンポジウム内において、山本さんは台湾出身選手のスライダーに着目

してその技術の伝播について紐解こうと試みていたし、謝さんは戦後の台湾「棒級」が技術や道具の面において日本をモデルとしたと述べていた。こうした道具や技術の伝播がどのようになされていったのかを丹念に追いかけていくことで、「台湾野球」「日本野球」と乱暴に二分化される日台の野球がいかに相互に影響を与え合ってきたのかを明らかにすることができるだろう。

ここまで挙げた以上の2点をポイントとして日台野球を考えるには、KANOの映画だけでは不十分であろう。更なる歴史的考察や現地での調査なども必要になってくるだろう。第2日目の野球ゲームで散見された「取りこぼし」のない、具な仕事が今後の課題だろう。だが、研究会初回の立ち上がりはその熱気も相まって非常に良く、クオリティスタートを達成したと言っていい。次回の継投に期待したい。■



そうは思わないよ、樹里安

カルチュラル・スタディーズ学会代表幹事 小笠原博毅 (神戸大学)

「そうは思わないよ」。何度も彼に返した言葉だ。

初めてのそれは、学会誌『年報カルチュラル・スタディーズ』第4号(2016年)に書評の寄稿を依頼したときのことだ。当時その編集長をしていた私は、博士論文執筆中の彼に原稿を依頼することをためらっていた。だから短めの文章でいいと言ったのだが、依頼された書物が自分の研究テーマとは少しかけ離れているからと、彼は別の書物との合わせ技で原稿を書くと言ってきた。当然文字数も執筆に割く時間も増え、「そんな事やってないで博論書きなさい」と指導教員から叱られる可能性も、増す。だからその提案に対して私は、「そうは思わないよ」と言った。

結果的に間違っていたのは私だった。松本創『誰が「橋下徹」をつくったか』(140B、2015年)にジョナサン・クレーリー『24/7——眠らない社会』(NTT出版、2015年)をぶつけ、接続を途切れさせず魅了される欲望をポピュリズムに読み込んだ、見事な書評が届けられたからである。人の話を聞いていないようで実は聞いていたり、本当に聞いていなかったり、聞いていないふりをしたりする樹里安の「癖」が見事に発揮されたのだった。

最後のそれは、差別やいじめを受ける女子高校生が登場する、「動かし続ける。自分を。未来を。」というグローバル・スポーツ企業のCM動画について議論したときだった。それを彼は概ね肯定的に評価していた。エンパワメントに寄せたコメントをどこかで発表もしていた。だが、差別に抗い自らの道を進む子どもたちが市場価値を持たされ投資対象になる陥穽を指摘しなければ、政治的正しさと「自己実現」を後押しするネオリベリズムの親和性に気づかないお粗末な「カルスタ」そのままではないか。レイシズムが「ある／ない」に終止して、人種が予め「ある」という前提を受け入れている彼の論調に、「そうは思わないよ」と私は異議を唱えた。

「あああああ」、「うおおおお」、「うんうんうんうん」。樹里安語を連発して鶏の唐揚げとコカ・コーラで作り上げた脳内物質を分泌させまくりながら何とか言葉を繰り出そうとする彼は最後にぼそっと、「人種差別はあるけど人種はないねんを、どううまく書くか」とつぶやいたあとに、「精進します！」と締めた。

「精進」する、か。そうは思わないよ、樹里安。君は精進するという約束を果たさず逝ってしまったのだから、もうできないではないか。それに、君がつぶやいた課題は一人では到底かなわない、知性を結集して取り組むべき作業だ。

樹里安、君の書いたもの、君が残した言葉、君に触発された人たちが結い集うことで、この問題にタックルし続けていくことにするよ。だから、君一人が精進すれば問が解けると君が思っている／たならば、私はまた言い返さなければならない。「そうは思わないよ」、と。



「言葉」を信じる

上原健太郎（大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科）

「上原さん、最近どうですか?」「そうね、最近はね」——大学・大学院の後輩であり、大切な親友でもあったケインとの会話はいつもこうして始まる。

わたしは普段、自分のことを話すことがすごく苦手な人間で、考えていることや思っていることを「言葉」で表現することにまったく自信がない。だからなるべく「言葉」は最小限に留め、無難にその場をやり過ごすような態度を小さい頃から身につけてきた。そんなわたしに対して、ケインは絶妙なタイミングでいつもこう聞いてくる。「上原さん、最近どうですか?」と。普段のわたしなら、適当に流して終わるところだが、不思議なことに、ケインの場合はいつも違った。自分でもおかしくらいケインの前では饒舌になった。ゼミのこと、最近読んだ論文のこと、書店で見つけた本のこと、研究のこと、バイト先のことなど、ケインには思わず「言葉」を使って話したくなる、そんな魅力がかれにはあった。上手に相槌をいれながら聞いてくれるかれの態度がわたしを気持ちよくさせたのかもしれない。ただわたしが忘れられないのは、かれはわたしの話をいっさい否定せず、すべてを受けとめてくれたということだ。この経験は、「言葉」を最小限に留めることを是としていたわたしにとって衝撃が大きく、「言葉」の持つ力をもっと信じてもいいのかもしれない、そう感じさせてくれる出来事でもあった。

ケインは「言葉」を大切にする人だった。看過できない社会問題に対して、さまざまな媒体を通じて「言葉」を発信し、警鐘を鳴らし続けるケインの姿勢は、じつに多くの人たちの共感と反響を呼んだ。普段の暮らしのなかで感じていてもなかなか「言葉」にすることが難しかった、あるいはそういう機会が与えられてこなかった人たちの感情や思いが、ケインの「言葉」を通じて表に出てきた瞬間でもあった。かつてのわたしと同じように、ケインが発信する「言葉」や問いかけに対して、ついついいろんなことをケインに話したくなった人は多かったはずだ。なにより、話した内容をまずは受けとめてくれる、そんな安心感がケインにはあった。別の言い方をすると、ケインは「言葉」の持つ魅力や可能性を、多くの人に身をもって指し示したのだと思う。これがケインという人間がわたしたちに残した非常に重要なメッセージのひとつだったと思っている。

ケインとは、15年という歳月をともに過ごすことができた。わたしはいまだに「言葉」を最小限に留める癖が抜けないし、苦手意識もずいぶんと残っている。それで後悔することも多々ある。けれど、「言葉」の持つ力を信じることの大切さをケインから教わったことは、わたしにとって大きな財産となっている。自分の持ち場で、できる範囲で、「言葉」を大切にしながら発信し続けていきたいと思う。そして、わたしや多くの人たちがケインに感じたように、もっともっとたくさんの人たちが自分の「言葉」で自分や社会について語りたくなる、そんな安心感のある場所を築いていきたい。

最高の親友、ケイン。本当にありがとう。



<出版情報>

2022 年下半期から 2022 年度末までに、ご執筆あるいは出版社様から学会事務局にご恵贈いただきました著作は下記のとおりです。ここにご紹介申し上げます。

・坂田邦子著『メディアとサバルタニティ——東日本大震災における言説的弱者と〈あわい〉』（明石書店、2022 年）。

・ティモシー・パチラット著、小坂恵理訳、羅芝賢解説『暴力のエスノグラフィー——産業化された屠殺と視界の政治』（明石書店、2022 年）。

・カイル・マイヤーズ著、上田勢子訳『ピンクとブルーに分けない育児——ジェンダー・クリエイティブな子育ての記録』（明石書店、2022 年）。

・ショーン・フェイ著、高井ゆと里訳、清水晶子解説『トランスジェンダー問題——議論は正義のために』（明石書店、2022 年）。

・梁仁實著『朝鮮映画の時代——帝国日本が創造した植民地表象』（法政大学出版局、2022 年）。

・金悠進著『ポピュラー音楽と現代政治——インドネシア 自立と依存の文化実践』（京都大学学術出版会、2023 年）。



News Letter
**Association for
Cultural Typhoon**

2023 年 4 月 3 日発行 創刊号

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲1-2-1
神戸大学 国際文化科学研究科 井上弘貴研究室気付
association.ct.secretary@gmail.com
<http://cultural-typhoon.com/act/jp/>